

♪ 2024年度 **poco a poco** ♪

Nr. 5 2024年6月6日(木)

文責:プファイル・辰巳

もうすぐ運動会

今週末は運動会ですね。運動会当日に向かって、少しずつお天気もよくなっているようです。当日は青空の下、運動会が無事開催されるといいですね。

体育の授業での取り組み、休み時間を使っての応援練習、そして全校児童生徒が集まって行われた全校練習。開会式や閉会式の練習だけではなく、玉入れや綱引きの練習も入ってくると、自然に応援の声も上がり、本番に向けて気分も盛り上がってきたところです。当日のみなさんの活躍が楽しみです。



音楽こぼれ話 < The Sound of Silence ② >

前は『静寂から生まれる音楽』について考えてみました。今日は『音楽の中にある静寂 ~ 休符』というものについて考えたいと思います。曲の中に出てくる休符はどんな役割を果たしているのでしょうか。

「休符」というぐらいですから、曲の途中で演奏者が休憩するためにあるのでしょうか。あるいは歌ったり、管楽器を吹いたりしている人が息を継ぐためにあるのでしょうか。確かにちょうどいい場所に休符が出てくれば、そこで息継ぎをするのは自然なことです。

しかしながら、休符は息継ぎのためだけにあるのではなく、曲の流れの中で大切な役割を担う音符のひとつなのです。他の音符との組み合わせによって様々なリズムを構成する要素であり、曲のまとまり(フレーズ)を明瞭にする働きなどもあります。

休符があるからといって、そこで気を抜いてしまうと、演奏の流れを止めてしまうことにもなりかねない、演奏者にとってはなかなか手ごわい相手でもあります。音楽の授業で取り組んでいる曲に、ピアノの間奏がかなり長い曲もあります。曲が終わったわ

けではないのに、歌がお休みになるので、ここでも平気でおしゃべりを始める人がいます。前号のお話で書いた、ピアノ前奏の間におしゃべりをやめられない人と同じです。

たとえ長いお休みであっても、曲がまだ終わっていないときに、本当は気を抜いておしゃべりしてはいけません。自分はお休みであっても、ピアノ伴奏や他のパートの音の流れからはずれることなく、その緊張感を共有し続けなくてはなりません。そうしていると、次の出だし(ドイツ語で Einsatz といいます。)で、出遅れたり、間違えた音を出したりすることはほとんどないでしょう。

ひとつの曲が終わるまで緊張感を保ち続けるというのは、簡単なことではありません。クラシックの大規模な交響曲などは演奏時間が1時間を超える曲もあります。演奏する側も、聴く側も、緊張感を共有することになりますが、なかなか大仕事です。オペラやミュージカルなどでは、場面が盛り上がったところで大拍手が入ることがありますが、交響曲やソナタなどでは、楽章と楽章の間もシーンと次の始まりを待ちます。

慣れない人はここで拍手をしそうになるのですが、早まってはけません。この楽章と楽章の間の静寂も、演奏家の中では次の楽章へと続く大切な「間」であり、音楽の流れは止まっていないのです。

「休符」のお話から音楽の「間」のお話へと、少しずれてしまいましたが、2回に渡って『静寂と音楽』について考えてきました。「静寂」について考えることは、何か日本文化特有の「わび寂び」にも通じるものがあるように思えてきました。大晦日の静かな夜に響く「除夜の鐘」や静かな日本庭園に響く「鹿威し」の音、茶室で聞こえる窯の中で沸く湯の音…。耳をすませて、いろいろな音や音楽を生活の中で発見してみてください。



ほんのちょっとだけ 音楽会情報

フランクフルト・ドームのパイプオルガン・マティネー(お昼のコンサート)

レーマー広場近くにあるカイザー・ドームで、月に1度、土曜日のお昼に30分間のパイプオルガン・コンサートが開かれています。6月~8月の予定は下記の通り。

6月15日(土) 12時30分から

7月6日(土) 12時30分から

8月24日(土) 12時30分から

いずれも約30分の演奏

入場料は5€(当日、入口にて)